

私私興本に對して、強き期待と希望を持つ根柢の幾つかがある。

第一に、業種からして内外の變化に對応する姿勢を持つてゐること。

第二に、広大な土地と公寢は、社々權威と責任にかか

つてゐることを自覺してゐること。

第三に、外貨の輸入、其他貿易移出入基地として、佐

伯港灣行政に、諸企業側としてカリーダージ

ツプをとり、市政とダイヤツプでできる素地が

あること。

第四に、興人の變化は、佐伯臨海工業を以てなく、地

域産業の開發を大きく変える力があること。

私達は外から志接したい。そして長い目で見たい。き

つと外觀からも、内容面からも、市民に愛され、期待に

そり大工場となることを信じてゐる。

(この項終)

研究

村里にそむくもの

赤木村大庄屋文書の周辺(その七)

会員 羽 柴 弘

焼けつくような炎天下、全身汗でビツショリの田や畑の仕事、傷けが傷けどその労苦の徒晶は殆んどをお上(藩庁)に吸い上げられていた江戸時代の農民たち、その報われない姿は赤木村に於ても同じであつた。然し中にはその憤懣を次の様な形であらわし、抵抗をこゝろ及て

(資料 三十一)

覚

津井浦 静 吉

右之者去安政五年三月 予細御座候ニ付当村へ所替被 仰付届申候迄 平日親身成前ニ御座候 然又当止月中旬頃公不快御座候迄 近來ニ相成運々 救急差重リ 最早生死之程も難計御座候 依此段御断申上候 以上

西七月廿四日

後 人印

津井浦で静吉がどのような曲事としてのお咎めで身つたかそれはわからないが、所替(村からの追放)で赤木村に預けられた(恐らく冷たい眼で見られる生活であつたろうか)寂気が進んでも早や生死の程も預束ないといふの唐書である

又こんなものもある

(資料 三十一)

覚

赤木村百姓 □右衛門 弟 用 吉

用 吉 四十七歳

友江家内娘 志 十五歳

右之者共吉月七日夜 家内之首江何様之儀も不申聞

村方立出申候 徳兵衛 家内 弟

右之者共当月十日夜家内之者江何様之義も不申候
方立出中候
右之者共書面之通夫々村方立出申候ニ付所々吟味仕
候得共□行方相分不申候 依此段御断申上候 以上
酉四月廿三日 役 人印

前の兩名は恋の駈落とナレは浮瑠璃「桂川連理桐」の
お半長右衛門といつたところであるが、どうもその確証
はない。彼の兩名も事情は全くわかんない。はつきり
していることは村方役人では勿論家内(家族の義)にも注
ず出奔したことである。家庭の事情、生活苦ではないか
と考えるがどうであるか。

(資料三十一)

奉願口上書

赤木村 百姓

藤 市

右之者平日人極不所存成者御座候に付殺人始親類五
人組共度々意見仕候得共相用不申候依之村方帳面拂
申度親類五人組共奉願候

右願之通被為 仰付被下候は難有仕合可奉存候
哉奉願候如件

安政六年十二月廿八日 役 人印

(右読下し) 願い奉る口上書 赤木村百姓 藤七

右之者平日人極不所存成者に御座候に付き、役人始親
類五人組共度々意見仕候得共相用不申候依之村
方帳面(より)掛申度親類五人組共願い奉り候
右願の通り仰付為され下され候は有難き仕合に
存じ奉る可く候 依之願い奉り候と云候事知し

これははつきりしている。度々説得もきき入れない
不所存者の藤七を、赤木村から除名しようといひであ
る。この願書は恐らく五人組からも親戚からも連署で出
されたであろう。異端者として赤木村から除名された藤
七という男、どんな子素は行状であつたか。年令もわか
らない。流亡の生活に追ひこまれたことにならぬ。

(資料三十三)

覚

右者赤木村新平与申者盗賊といふし、其儀は付段々
御願ニ付内細ニ取斗らひ仕候延右入用為銀百三十大
必随に受取申候 然延右之儀ニ付於今後いよいよ申聞
敷候 依如件

元文元年五月

延岡比 藤吉

赤木村

井上氏 藤

赤木村下と号ては恥を話、村出身の新平が延岡と長井
村で盗取したと云う。内情下と云うことで井上氏か
ら銀百三十大と先方に支払つた、その受取書であり、

今後とやかく申さない（いかや申聞敷）とする示談書である。盗賊という訛感では、たゞそのに南にえるが、窃盗でしした。またあるう、井ノ上氏（珍々く萬字）が赤木村でいん立場からこの交渉に当つたもの外はつきりしない。（神保の元巫師井上氏の生祖でもある）

事ノ序に、全国指名手配書とてと云うべき文書が記されている。これとは民間同じものが大分圖書館所蔵の「因尾村大庄屋文書」にもある。それとあけて見よう。

（資料 三十四）

公儀御觸書 左之通写

去来五月十七日夜三河所差丁目立人組持地借勇八并同人妻きん江為疋負逃去儀右勇八召仕伊三郎人相書

一 当中廿九歳 生国式州高井戸宿在之也

一 中文中内の方

一 一面髻 平瀬二面類こけ儀方

一 髮 形代とも薄き方 眉毛同断

一 鼻筋通り小鼻左の方ほく路有之

一 唇厚く歯並能き方 耳常髻 言舌静成方

一 其節之衣類 木綿中形単物と着し 同三尺帯と

右之通之者於有之者其所ニ留置 御料者御代官 私領者領主地頭江申出 夫より江戸池田橋藤守番所江可申出候

赤木大庄屋文書には、外にもこれらに類する觸書が数通残されているが、大庄屋、庄屋、地目附、租頭（五人組）と、いれゆる村役人が統轄はしているものの、その民衆の把握力は決して充分ではなかつたようである。だから出奔者があつたり不所存者が出たり、村役人が責任を問われることになつた。しかしそれはいつい時代、どこの村里にもあることで、現代でも似たようなことである。だが今日とちがひ情報通達にのみならず、昨日と要している。資料三十四の事件など（今日ではさうにある事件）テレビムブラウン管を通じて、何時向と友友ないうち、全国津々浦々に至るまでの家庭の茶の間に犯人の顔写真まで写し出される。去年（去年）五月の事件が殆んど一年位たつた後にこの御触書がまわっている。それはとに角この貧しい山里赤木村、村にそむいて他國に流亡する人が父々と出ていることに注目したい。

右之通御觸有之候聞得其意 若古懸之もの見掛候 日甚差留置早々可申出候 右之趣亦々百世共近不渡候可申聞候 此廻状令請印 早々順違 留不吉野半太夫方へ可相返候 以上

申 四月四日

山 (巴) 藤左衛門

明 (名) 大 助

古 (質) 土郎左衛門

塩屋村の下野村上野村

津久見浦留り

同十二日夕方請取十四日中野村 庄屋(おとし)

△印上下ニ行宛は廻状の請取、次の村への送達 廻状のルートがわかつて面白い。この廻状は塩屋村(佐伯城下)→下野村(鶴岡)→切畑村→下直見村→上直見村→仁田原村→磯川村→因尾村→中野村→上野村→辰向村→大坂津村→赤木村→津久見と在(さ)をまわし、今の上野→中野→下野と浦とまわす方式であつたようだ。

(この項終り)

記録

日田・中津に文教の史跡を訪へ

(七月十八日・十九日 定例研修行事として)

(羽柴幹事記)

かねてより念願していた、日田と中津に文教の先賢者
の跡を訪ね、文教都市の姿を見んものど計画した研修旅
行、急に一週間繰上げ実施となった關係が参加者も意外
に少く、定刻のバスに乗ったのは高木、高野、若杉、吉田、
大友、深谷、上杉、小野、山本、羽柴の十名。少人数もよ
し、研修の実効を挙ぐるはむしろ少人数をよしとする平
素の持論がむく／＼と心中に湧き起るのを愛えた。

大分県からは浪津、それも豊後院で修行に乗りつゝという午前中の日程
日田に着いたのが丁度正午。日田には廣瀬恒太氏が待て置けて下さる。
まず、河原ともおれ、飯館へいらすと、取前へおれ、飯館へいらすと、志摩が利
ていく快適である。食後一息、いれながら、飯館の日程と打ち合せ。

先ず第一は咸宜園の墓路に残る唯一の建物「秋風庵」
淡窓先生が起居された、ついで昔のままのお住居である。
淡窓先生のお墓と共に国指定の文蹟である。山川克己先生が咸
宜園の教育について解説下さる。中島子玉や高野長英ら
の自署の入門簿(但し後写)を示され、全国から増集の青
少年数千の塾生活、毎月行われていた月旦表(成績評価)
など、細々とお話し下さる。お話しから、先生が明治大
助ここに訪れ、その紹介により中嶋増彦、吉田家作入門
し、特に子玉は数千の門弟中、秀才第一としてその師淡
窓に愛されていて、聞く私達も大いに意を強くしたもので
ある。

秋風庵を出たところ、淡窓図書館前に次の詩碑が建っている。
さうまでなく淡窓先生、咸宜園教育を詠んだものである。
休道他郷多苦辛 同祀有友自相親
秋風庵と出たところ、淡窓図書館前に次の詩碑が建っている。
休道他郷多苦辛 同祀有友自相親
秋風庵と出たところ、淡窓図書館前に次の詩碑が建っている。
休道他郷多苦辛 同祀有友自相親

私達は魚町、廣瀬宗家を訪ねた。即ち廣瀬代議士のお
宅である。江戸時代のままの、思も広瀬家祿得の雰囲気
の漂うお宅で、一回は直ぐに新築成った裏手の收藏
庫に導かれる。鉄筋コンクリート、防災、防虫、防湿等完
全な收藏庫である。淡窓先生の懐旧樓半記や万善斎など
の原本、月化、桃秋、旭莊、林外、青村等、おもしろ廣瀬八賢
の遺墨、遺品が整然と整理され、完全且つ永久に保存さ
れている。これはまさことにすばらしいこと。私達はこれら
は広瀬家のおも、一本柳家の日記でなれて、日田市の、
いや大分県の、いや日本のほころぶべき教育の大遺産であ
る。これは江戸時代後期の家塾教育を伝えるに類ない文
化財であると思つた。

せうは日田代庫による九州支配の跡を見んものと月限公園に
向つたのであつたが、途中大雨となり、止まらうにもないで、悪い切つて
予定を変更して、車で限所平野五兵上への寺念寺に向つた。
御院家平野八郎は、浪太出身、旧姓兒王、佐伯中宮二十三回生である。
縁縁あつて五岳上人の法燈を解かれておられるか、正直に言つて
私のお兵上へ対する知識は「大分県偉人伝」による程度で、理解さ
めて薄らうであつた。

私共は先ず摩理の太広間に招せられ、一通いお話を伺
つて、五岳上人の書画を次々に拝見する。八十五歳の高
令で、さくなるれるまで、に筆をこられた書画を愛蔵されて
いる方がいかに多いことか。軸物が次々と淋けられて、そ
れぞれお話がある。淡窓先生や竹田先生や、その他有名
な方々の軸がいくらでもあり、私共々の半分は消化し、
れがたい。平野氏は広瀬淡窓先生の、龜山の詩の巻紙、一人間
五岳と題する五岳上人の詩巻を、さんざん下す。ありが
たい限りである。